

世界短編名作選

イタリア編

監修 蔵原惟人



新日本出版社

世界短編名作選

イタリア編

監修 蔵原 惟人

編集 大久保昭男

高橋勝之

山崎 功

世界短編名作選 イタリア編

1977年6月15日 初版
1982年3月20日 第2刷

定価 1200円

監修	蔵原	性人
編集	大久保	昭男
	高橋	勝之
	山崎	功
発行者	松宮	龍起

郵便番号151 東京都渋谷区千駄ヶ谷3の11の8

発行所 株式会社 新日本出版社

電話 東京 (478) 3311 (代表)

振替番号 東京 3 13681

印刷 享有堂印刷 製本 小泉製本

落丁・乱丁がありましたらおとりかえいたします。

本書の内容の一部または全体を無断で複写複製(コピー)して配布することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版社の権利の侵害になります。小社あて事前に承諾をお求めください

世界短編名作選
イタリヤ編
目次

〔近代〕

難破船	デ・アミーチス／劍持弘子訳	5
銀の十字架	フォガッツァーロ／劍持弘子訳	13
カヴァツレリーア
ルステイカーナ	ヴェルガ／諏訪矜子訳	25
雌狼	ヴェルガ／諏訪矜子訳	35
小礼拝堂	ピランデッロ／山崎功訳	43
学校にて	セラオー／劍持弘子訳	59
農家の小さい庭	ネーグリ／劍持弘子訳	69
明暗	デレッダ／諏訪矜子訳	77
一理髮師の思い出	ジェルマネット／諏訪矜子訳	87
ポントテルongoの悪魔	バッケツリ／山崎功訳	101
キリストはエボリにとどまった	レーヴィ／山崎功訳	119

〔現代〕

コント三編	グアレスキ／諏訪羚子訳	133
病人の冬	モラヴィア／大久保昭男訳	143
闖入者	バヴェーゼ／米川良夫訳	179
十月のぼくとファシスト	ヴィットリーニ／米川良夫訳	193
引越し	プラトリーニ／大久保昭男訳	201
一九四三年の一夜	バッサーニ／大久保昭男訳	211
彼と私	ギンズブルグ／竹腰朝訳	249
新しい人生の門出	カッソーラ／竹腰朝訳	263
最後に鴉がやってくる	カルヴィーノ／米川良夫訳	275
七首酒場の許婚者	パゾリーニ／米川良夫訳	283

写真提供 イタリア文化会館
(ネーグリ、デレッダ、パッ
ケッリ、カルヴィーノ)

難 破 船

『クオレ』より

デ・アミーチス
劍持弘子 訳



エドモンド・デ・アミーチス

(一八四六〜一九〇八)

主要作品『クオレ』(一八八六)、『一教師の物語』(一八九〇)、『労働者の小さい女教師』(一八九五)、『市民の闘争』(一八九九)

何年か前のこと、十二月のある朝、一隻の大きな汽船がリヴァールプールの港から出帆した。船は、七十人の乗組員を入れて二百人以上の人びとを乗せていた。船長と船員のほとんどがイギリス人であった。船客の中には、いろいろなイタリア人がいたが、女が三人、司祭が一人、それに演奏家の一行という顔ぶれであった。船はマルタ島に行くはずであった。空は曇っていた。

三等船客の中にまじって、船首の方に十二歳になるイタリアの少年が一人いた。年のわりには小柄であったが、がっしりしており、シチリア人らしい不敵な、ひきしまった美しい顔つきをしていた。少年はただ一人前櫓まへこぎの近くでロープの山に腰をおろしていた。自分の身の廻りのものをつめたすりきれた靴をそばに置いて、その上に片手をかけていた。褐色の顔をしていて、黒い波うった髪の毛はほとんど肩まで垂れていた。みすばらしい身なりをしていて、肩に破れた毛布をかけ、古い革のさげ靴を肩から斜めにかけていた。自分のまわりの船客や、船や、駆けて通り過ぎていく船員たちや、波立っている海を、物思わしげに眺めま

わしていた。家庭の大きな不幸からたったいま出てきたばかりの少年という様子をしていた。その子どもらしい顔には、大人のような表情をたたえていた。

船が出るとまもなく、その船の船員の一人であった灰色の髪をしたイタリア人が、一人の少女の手をひいてあらわれ、シチリアの少年の前で立ちどまっていた。

「ほら、君の旅の道づれだよ、マリオ」

そして、やがて立ち去った。

少女は、ロープの山の少年の傍らに腰をおろした。

二人は顔を見あわせた。

「どこへいくの？」と少年がきいた。

少女は答えた。

「マルタへ。ナポリを通過して」

それからつけ加えた。

「私を待っている父と母に会いに帰るの。私はジュリエッタ・ファッジャーニというんです」

少年はなにもいわなかった。

しばらくして少年は下げ靴からパンと干した果物を取りだした。少女はビスケットをもっていた。二人は食べた。

「元氣を出すんだよ！」

あのイタリア人の船員が足早やに通り過ぎながらどなっ

た。「さあ、ちょっとした踊りがはじまるよ」

風が強くなってきて、船はひどく揺れていたが、船に酔っていなかった二人の子どもたちは、そんなことは気にもとめなかった。かわいい少女はほほえんでいた。少女は少年とだいたいおなじ年ごろだったが、背丈はかなり高かった。顔は褐色で、やせてどこか弱々しく、とても粗末な身なりをしていた。短く切った、ちぢれた髪をしていて、そのまわりに赤いハンカチを巻き、耳には銀の小さな二つの輪をつけていた。

二人は食べながら自分たちの身の上を話しあった。少年には父親も母親も、もういなかった。労働者であった父親が、数日前にリヴァプールで少年をたった一人残して死んでしまったので、イタリアの領事が少年を、その故郷のパレルモに送りかえたのであった。そこには少年の遠い親戚が残っていた。少女は、一年前に、彼女をとともかわいがっていた未亡人の叔母につれられて、ロンドンにきていた。少女の両親は——貧乏だったので——遺産を相続させるという約束を信用して、しばらくのあいだ彼女を預けたのだった。ところが、数ヶ月後、叔母は乗合馬車にひかれて一文も残さず死んでしまった。そこで少女も領事に助けを求め、領事は彼女をイタリア行きの船に乗せたのであ

った。二人ともあのイタリア人の船員にたのんであった。

「だから」と少女は話を結んだ。「私の父と母は、私がお金持になって帰ってくると信じていたの。ところが私は貧乏なまま帰るんだわ。でも、やはりおなじように私をかわいがってくれるのよ。弟たちもよろこんでくれるわ。四人いるんだけどみんな小さいの。私は一番上なの。みんなに服を着せてやるのよ。私をみたら大騒ぎしてくれるでしょう。私はつまさきでそっと入って行って……。海が荒れてるわ」

それから少年にきいた。

「それで、あなたは親戚の人たちのところへ行って、いっしょに暮すの？」

「うん……もしいいと思ったらね」と少年は答えた。

「あなたのことを好きではないの？」

「わからない」

「私、クリスマスで十三歳になるのよ」と少女はいった。

そのあと、二人は海のことや二人のまわりにいる人たちのことを話しはじめた。二人は一日じゅういっしょにいて、ときどきなにかしら話しあっていた。船客たちは二人を姉弟だと思っていた。少女は編物をしていた。少年は考えごとをしていた。海はますます荒れてきていた。夕方、

寝にいくために別れるときがくると、少女はマリオにいった。

「ぐっすりおやすみなさい」

「だれもよく眠れやしないよ。かわいそうな子どもたち！」と、あのイタリア人の船員が、船長に呼ばれて駆けて通り過ぎながらどなった。少年が、少女に「おやすみ」と答えようとしたときだった。ふいに水のしぶきが激しく襲いかかり、少年をベンチにたたきつけた。「まあ、どうしましょう、血が出てるわ！」少女はそう叫んで、少年の上に身を投げかけた。船客たちは下に逃げこんでいて、それに気がつかなかった。少女は、たたきつけられてびっくりしていたマリオのそばに膝をついて、血のでている額を拭いてやり、自分の髪から赤いハンカチをはずすと、それを少年の頭に巻いて、両はしを結ぶために少年の頭を自分の胸におしつけた。そのために、少女の黄色い服のベルトの上のあたりに血のしみが一つできた。マリオは身ぶるいして、ふたたび立ち上った。

「気分はよくなつて？」と少女は聞いた。

「もうなんともないよ」と少年は答えた。

「おやすみなさい」とジュリエッタがいった。

「おやすみ」とマリオが答えた。そして、となりあつた二

つの小さな階段を、それぞれの寝室に降りていった。

あの船員の予言した通りだった。まだ眠りつかないうちに、おそろしい嵐がまき起った。それは、荒れ狂った大きな馬が何頭もいきなり襲いかかったようなものであった。またたく間に帆柱を一本へし折り、クレーンにつるされていた三隻のボートと船首にいた四頭の牡牛を木の葉のようにさらってしまってしまった。船の中は、混乱と恐怖と、物ごわれる音と、叫び声や泣き声や折り声のごちゃまぜになった騒ぎが起って、髪の毛もさかだつようであった。嵐は夜のあいだにますます勢いを強めていた。夜が明けるころにはいっそうひどくなっていた。おそろしい波が船を斜めに打ち、甲板の上になだれこんで、あらゆる物をたたき壊し、取り払い、水の中にひっさらって行ってしまった。機械を覆っていた木枠がぶちぬかれ、水がおそろしい音をたてて中にとびこんだ。火が消えて機関士たちは逃げ出した。太い水の流れが、四方八方からどつと流れこんだ。雷のような大声が叫んだ。「ポンプにかかれ！」それは船長の声だった。船員たちはポンプにとびついた。しかし、突然、山のような波が船をうしろから襲い、手すりと舷窓をこわして奔流の中にたたきこんだ。

船客はみな、生きた心地もなく、大広間にひそんでいた。

やがて、船長が姿をみせた。

「船長！ 船長！」みなはいっせいに叫んだ。

「どうなんですか？ どうなってるんでしょう？ 望みはあるのですか？ 助けて下さい！」

船長は、みなが静かになるのを待って、冷然としていった。

「あきらめましょう」

一人だけ女の人が「ああ！」と悲鳴をあげた。他にはだれ一人として声も出せなかった。恐怖がみなを凍りつかせてしまっていた。長い時が、こうして墓場のような静けさのうちに過ぎていった。みなは真蒼になっておたがいにみつめあっていた。海はあいかわらずぞつとするほど荒れ狂っていた。船は重苦しく揺れていた。そのうちに船長は、救命ボートを海におろそうとした。五人の船員が船に乗りこみ、ボートはおりた。しかし、波がひっくりかえしてしまった。二人の船員が溺れ死に、その中にはあのイタリヤ人もいた。他の船員はやつこのことで綱につかまることができ、もう一度のぼってきた。

このあとは、船員自身がすっかり勇気をなくしてしまった。二時間もすると、船はすでに綱張台の高さまで水に沈んでいった。

そのあいだに、甲板ではおそろしい光景がくりひろげられていた。母親たちは、絶望のあまり子どもたちを抱きしめていた。友人どうしは抱きあって別れの言葉をいいあっていた。何人かが、海をみないで死のうとして船室に降りていった。ある旅行者は、自分の頭にピストルをうちこんで寢室の階段の上につぶせに倒れ、そこで息絶えてしまった。多くの人が、夢中になって互いにしがみついていた。司女の人たちは、激しくふるえながら身もだえしていた。司祭のまわりにひざまずいている者もかなりいた。すすり泣きの声や、子どもの泣き声や、鋭い異様な声がいっしょになつてきこえていた。なにをみるでもなくただ大きく目を見ひらいて、ぼうぜんと彫像のように動かないでいる人びとや、死人か狂人かのように見える顔があちらにもこちらにもあった。二人の子どもたち、マリオとジュリエッタは、船の帆柱にしがみついて、放心したように目をすえて海を眺めていた。

海は少し静かになっていたが、船はゆっくり沈みつづけていた。もう、ほんの数分間しか残っていなかった。

「大ボートをおろせ！」と船長がどなった。

残っていた最後の一隻が水に投げられ、十四人の船員が三人の船客と乗り込んだ。

船長は甲板に残った。

「私たちといっしょにきて下さい！」と船員たちが下から叫んだ。

「私は、自分の持ち場で死ななければならない」と船長は答えた。

「船に出あいますよ」と船員たちは叫んだ。

「私たちは助かるんですよ。降りてきて下さい。あなたは死んでしまいます」

「私は残る」

「まだ一人乗れます！」とそのとき、船員たちは他の船客に向けて叫んだ。「女を一人！」

一人の女が船長に支えられて前に出た。しかし、大ボートとの距離をみると、とび降りる気をなくして、甲板の上にもた倒れてしまった。他の女たちは、もうほとんど全部が気を失って、死んだようになっていた。

「子どもを一人！」と船員たちが叫んだ。

その叫び声に、そのときまで、あまりの驚きに石のようになつていたシチリアの少年とその道づれの少女は、突然、生命のはげしい本能によびさまされて、帆柱から同時に離れると、「私を！」といっせいに叫んで、二匹の猛り狂った野獣のように互いにうしろにつきのけようとしなが

ら船べりにとんでいった。

「小さい方だ！」と船員たちは叫んだ。「ボートは積みすぎてるんだ！ 小さい方だ！」

その言葉を聞くと、少女は雷にうたれたように両腕をだらしと落して、うつろな眼でマリオをじっと眺めて動かなくなった。

マリオは一瞬彼女をみた。——彼女の胸に血のしみがついているのがみえた。——思い出した。——気高い考えがひらめいて、少年の顔に光がよぎった。

「小さい方だ！」もう待ちきれなくなって船員たちはいっせいに叫んだ。「いってしまふよ！」

そのときマリオは、もう自分の声とは思えないような声で叫んだ。

「この人の方が軽いです。ジュリエッタ、君だ！ 君にはおとうさんもおかあさんもいるんだ！ 僕は一人ぼっちなんだ。君に僕の席をあげるよ！ いきたまえ！」

「その子を海に投げてくれ！」と船員たちがどなった。

マリオはジュリエッタの体をつかんで海に投げた。

少女は、あつと叫んで水にどぶんと落ちた。一人の船員が彼女の腕をつかんでボートにひきあげた。

少年は、船べりにすくと立っていた。額をあげ、髪を

風になびかせ、じっと動かない、落ち着いた気高い姿であつた。

ポートは動きだして、沈んでいく船がまき起した、ポートをひっくりかえそうとする水の渦から、危いところで免れることができた。

そのとき、それまでほとんど気を失っていた少女が、少年の方に向つて目をあげると、わっと泣きだした。

「さようなら、マリオ！」すすり泣きながら少女は、少年の方に両手をさしのべて叫んだ。「さようなら！ さようなら！ さようなら！」

「さようなら！」少年は片手を高くあげて答えた。

ポートは、暗い空の下、波立つ海の上をすばやく遠ざかっていった。船の上では、もうだれも叫んではいなかった。水は、すでに甲板のへりをなめていた。

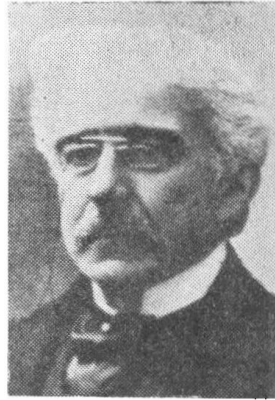
突然、少年はひざまずくと、両手をあわせ、眼を天に向けた。

少女は顔をおおった。

少女は、ふたたび顔をあげ、海上をみまわした。船はもうなかった。

銀の十字架

フ
オ
ガ
ツ
ツ
ア
ー
ロ
剣
持
弘
子
訳



アントニオ・フォガツァーロ

(一八四二～一九一一)

主要作品『マロムブラ』(一八八一)、『小さい旧世界』

(一八九五)、『小さい現代世界』(一九〇二)